



とねりこの樹

—The Ash-tree—



とねりこの樹

東イングランドをずっと旅行した人は、誰でも、ちいさな田家—どこやら湿っぽい建物で、普通イタリイ風の、まず八十エーカーから百エーカーもあるという耕野にとりまかれた田家を、知っているはずだ。筆者には、これがいつも非常に強く目につくのだ。裂けたけだかい灰色の檜の樹、芦の生い茂った沼、遠い森の線—

そこで筆者は、柱廊ポーターイコ玄関が好きである。—十八世紀末の、ギリシヤ趣味を漂わした漆喰しっくい細工のある、アン女王（一七〇二年より十三年間在住したイギリス女王。）頃の赤煉瓦の館やかたにくつついていたような柱廊玄関が好きである。ホールは、内部は屋根にのぼれるようになって、どのホールも常に美術品とちいさなオルガンが備えつけてあるようなホールだ。また筆者は、図書室が好きである。十三世紀時代の

詩篇から、シェークスピア四折判本までもっているような図書室である。無論筆者は空想が好きである。なかんずく、こうした館やかたが建てられた当初の、その中の生活を空想し、また今とはずっとちがって、たとい金は多くもたなくても、趣味ももつと変り、生活もまったく面白かった頃の、地主華やかにし泰平の世の生活を空想することが好きである。筆者は、こうした館やかたの一つを持ちたいと思う。そしてその館にそぐわしいだけの金をもち、そこにつつましく友達をもてなしたいと思う。

だが、まあこれは、本題をはなれた話である。筆者は、ここに描叙したような館やかたに起った、ふしぎな事件の数々を語りたい。

それは、サツフォークのキャスリンガム・ホールで起ったことである。筆者はこの話のあつた時代以来、この建物について行われたいろいろのことを考えるが、筆者が描叙した主要の特徴は、まだそのまま

存している。―すなわち、イタリア式柱廊玄関^{ポリーティッコ}、外部よりも内部が古びている白い館の四角な一廓、森でかこまれた荘園や、沼―

ほかの家とは、ぐっとちがっているその館^{やかた}の一つの特徴は、もうなくなっていた。読者がそれを荘園から目を向けるなら、右手にすばらしく大きな、とねりこの老樹を認める筈だ。塀のつい五六ヤードそばに生い茂っていて、その枝を建物に触れるか触らぬかにひろげている。筆者はこの樹が、キャスリングが城塞でなくなり、濠は埋められエリザベス朝式の住家が建てられた以来も、ずっとそこに立っていたのだと思う。すくなくとも、この樹は、一六九〇年に、ほとんどその全広袤を占めたのだった。

その年に、このキャスリング・ホールのある地方は、多く魔女裁^{ウィッチ}判が行われた場所だった。筆者は思うのだが、むかしの、魔女に対する一般的恐怖の根本にある確かな理由―もしそこになにかの理由があ

るとするならば、その理由全体に正しい批判が与えられるまでには、ずいぶんな年月を要したのだった。この魔女への疑いを告訴した人々が、実際魔女たちが、ある種の異常な力をもっていたと思つたのか、あるいは力でなくとも、すくなくも、魔女たちが人々禍害わざわいを加える意志をもっていたと思つたのか、あるいは、魔女たちの多くが、魔女発見者のひたすらに残酷な拷問で無理やりに白状させられたのか——これ等のことは、筆者の想像では、なお解けざる疑問なのである。そしてここに掲げる奇譚は、筆者をためらわせる。筆者はこれを単なる作り話だとして、一概に斥けることができない。読者自身の判断にまかせなくてはなるまい。

キャスリングムでは、異教徒裁判所へ一人の囚人を送つた。それはマザーソール夫人という女だった。夫人は普通の田舎魔女ウィッチとちがつて、むしろ相応な生活をしており、かなり有力な身分だった。教区の評判

のいい五六の農夫は、彼女を救おうと骨折った。彼等は夫人の性質を懸命に証言し、陪審官の評決には非常な期待をかけた。

だが、この夫人に致命的だったのは、マシユウ・フェル卿という、キャスリングム・ホール（ホールは、領主または大地主の住宅。）の持主の証言だった。マシユウ卿は、家の窓から、三度までも夫人の行為を見たと言言した。満月の晩で、夫人は、『わたしの家のそばの、とねりこの樹から』小枝を集めたというのである。夫人は肌衣一枚で枝によじのぼり、異様に曲ったナイフで、小枝を切り取った、そしてその時、なにかひとりでブツブツ言うようにみえた。マシユウ卿は、夫人をとらえようとしたが、二度とも自分があやまって音をたてたので、いつも夫人に気づかれてしまった。そして卿が庭に駆けおりた時見たものは、莊園を横切って村の方へ走る、一疋の兎だった。

三度目の晩には、卿は努力して全速力を出した。そしてマザーソー

ル夫人の家へ、まっしぐらに追っかけた。だがドアをたたいても十五分ばかり待たされた。夫人はひどくプリプリして、いまベッドから出たような、眠むげな顔をしながら出て来た。卿はなじったが、なにも答えらしい答は得られなかった。これがおもな証拠となつて、教区の他の人達からも、ずいぶん注目すべき、非常な同情があつたにもかかわらず、マザーソール夫人は有罪となり、死刑を宣告された。裁判の一週間後、夫人は、五六人以上の、同様に不幸な仲間といっしよに、バリー・セント・エドマンズで、絞首刑に処せられた。

州執行官代理だったマシユウ・フェル卿は、その死刑執行に立ち会った。陰鬱な、目まいのしそうな三月の朝、ノースゲートの外の、絞首台が設けられた雑草の茂った丘へ、馬車を駆った。ほかの囚人達は、悲歎のあまりぼんやりして、崩折くずおれていた。だがマザーソール夫人だけは、死に直面しても、生前のごとく、いかにも異様な性質をあらわ

していた。当時の記録係はこうしている。

『彼女の毒々しき憤怒は、立会人見物人はおろか、実に刑執行人にすら、恐ろしさを感ぜしめたり。彼女を目撃せる者はみな、彼女が荒ぶる悪魔の生きながらの形相かたちを示したる事を、断言して止まざりき。彼女は、並みいる法官に対しては、なんらの抗議も口にする事なかりしと雖も、彼女を絞首台上に引き行く者を見あげたるその形相の凄まじさと毒々しさは―後に彼等の一人がわれに確言するところによれば―実に、半歳を経るもなお、それを思うだに深く心に慄然たるものをおぼえしむるほどなりき。』

ところで、この記録には、夫人が死にあたって、なんだかわけのわからない言葉をいったとしるしてあった。それは、『いまにキャスリಂಗム・ホールには、お客があるだろうよ。』といった言葉で、夫人は低く、二度三度と、これを口の中で繰り返えしたのだった。

マッシュウ・フェル卿は、こうした夫人の態度に、平然としているわけではなかった。卿は陪審官の任務を終えると、教区の牧師といっしよに帰館したのであるが、その牧師ともこの事件を語り合った。裁判にあたっての卿の証言は、好んで提出したものでなく、また卿は、特に魔女見破りの狂癡に罹っている者ではないと言った。だが、卿は、向後もこの事件には、これ以上語るべきものはないし、自分が目撃した事実については、決して誤ってはいないと明言した。更に卿は言葉を つづけて、この処刑全般は、自分の本心には悖^{もと}つていゝものである、自分は周辺の人々の幸福を願う人間なのである、だが、陪審官がなすべき任務を思い、それを厳然と果したのだと言った。これはいかにも卿の真情であるようにみえた。で、牧師も、これに道理ある人の当然の行為として、賛意を表したのだった。

数週日の後、五月の、月まどかなる宵、牧師とマッシュウ・フェル卿は、

また莊園で会った。いっしょにホールへあるいて行った。フェル夫人は、その母堂が重態だったので実家さとへ行っていて、マシユウ卿は家に一人いるのだった。で、牧師のクローム氏は、ホールで夜食をたべるよう、しきりに勧められた。

マシユウ卿は、その晩は、大していい機嫌ではなかった。話は主として家族や教区のことに走ったが、これをよい機会に、卿は、自分の財産に関する希望なり意見なりを述べる覚書を作成した。この覚書は、後になって非常に大事なものとなった。

クローム氏が辞去しようと考えたのは、九時半頃で、マシユウ卿と彼は、館やかたの裏手の砂利を敷いた遊歩路で、ちよつと向きを変えた。その時、クローム氏をドキンとさせた唯一の事件は、こうだった。――二人は、筆者が、さきに、建物の窓のそばに生い茂っていると書いた、あのとねりこの樹を見やったのだが、マシユウ卿は立ちどまって言っ

た。

『おや、とねりこの幹を、なんか駆けのぼったり駆けおりたりしてる。あれは栗鼠^{りす}じゃあるまい。栗鼠なら今時分は、みんな巢の中で眠っているはずだ。』

牧師はその動いているものへ目をやった。が、月の光では、その色あいはまるでわからなかった。しかし、瞬間にみとめたかっきりした輪廓は、頭脳に深く印せられた。そして、ばかげたことだと言われようと、それは栗鼠であるないは別にして、四つ足以上の足をもつていと、彼は断言し得たのだった。

しかし、この瞬間的な幻影ともいっていいものは、それきりで止んだ。二人はそこで別れた。―それ以来二人が会ったのは、二十年間も経ったというようなことではなかった。

翌日、マシユウ・フェル卿は、いつもの習慣のように、朝六時に二

階から下りては来なかった。いや、七時になっても八時になっても、下りて来なかった。そこで従僕^{しもべ}たちは、卿の寢室へ行つてドアをノックした。従僕たちが、不安らしく耳をすまし、幾度も鏡板を打ちつづける描叙を、ながながと書くには及ばない。とうとうドアは外側から開けられたが、室内で発見されたものは、黒ずんで死んでいる卿の姿なのだった。読者がてつきり想像されるような、暴力のしるしは、その時には一つも見うけられなかった。だが窓は開け放たれていた。

従僕の一人は、牧師を呼びにゆき、それから牧師の指図で、検屍官に知らせるため馬を飛ばした。牧師のクローム氏は、大急ぎでホールへ駆けつけた。そして屍体のある室を見た。氏はマシユウ卿に対する真の尊敬と哀悼を示す一文を紙に書きのこした。ここに筆者が写しとったこの一節は、事件の経過と、その時代の一般的信仰を、あきらかにするためのものである。――

『入口には寢室に押し入らんとしたる』とき、わずかの形跡すら認められざりしと雖も、故人がこの季節には、常に閉じケースメントいたりし窓扉は、開け放たれいたり。彼は約一パイント「三合強」入りの銀器に、少量の強麦酒エールを晩酌としたりしが、今宵はそれを飲み干しおらざりき。この飲料はバリーより来れる医師ホジキンス氏といえる人により、検査せられたり。されど氏は、後にも検屍官の査問に対して誓言せると同じく、その中になんら有毒なる物質を発見し得ずと述べぬ。屍体のいたく脹はれあがりたると黒ずみたることには、当然近隣の人々も、毒薬にもやと語り合えりしなり。ベットに横わりし屍体は、甚だしく取り乱しおりて、その極度なる惨状は、わが徳たかき友にして保護者なりし人が、いかに苦痛苦惱裡に死せるかを、如実に推測して余りありとおぼゆ。なおここに不可解なる事、且つ余自身にとりては、この兇猛なる殺人の加害者が行いたる、或る恐るべき巧妙なる手段の論拠ともな

らん一事あり。そは、屍体の洗淨と埋葬とをゆだねられたる女子達に
関してのことなり。これ等の女子は所謂泣き女にして、その職業には
好適の女子なりしが、わが前に来りて心身ともに苦痛と疲労に耐えざ
るを訴う。たしかに一見して余はその真なるを知る。彼女等は曰く、
われ等屍体の腕に素手を触るや否、たなこころ掌にいとふしぎなる疼くが如く刺
すが如き痛味を感じたり。そは両の前膊に及び、久しからずしてかく
も甚だしく脹はれあがりたりと。この激痛はなお継続して、実に数週日
の間、彼女等は、その職業をそのまま実地に、泣き叫びて過したりと
の事なりき。しかも彼女達の皮膚には、なんらの異状も認められざり
しなり。―彼女等の訴を聞くや、余は、なお在館せし医師を招きぬ。
水晶のちさき拡大鏡の力を借り、充分注意して彼女等の肉体の、その
部分の皮膚を検診したりも、二つの小さき刺傷のほかは、なんら重要
なる事実を発見するを得ざりき。われ等はかのボルギア法王の指環、

その他前時代に於けるイタリアの毒殺者等が用いたる恐るべき手段の有名なる例を想起しつつ、この斑点が毒を導入せし痕跡ならずやと結論したり。―とにかく、マシユウ卿の屍体に認められたる徴候につきては、語るべき事なお多し。単に余自身の考査なれど、余が更に書き加うる点に關しては、そこになんらかの価値ありや否、そは子孫の判断に残さるべき問題なり。ベッドの傍らなる卓上には、小型の聖書一冊ありき。こはわが友マシユウ卿が、この書の尊きを思い、時間に寸毫の狂いなく、夜々の就床、朝々の起床に際し、定めたる部分を読みならわせしものなりき。而して余はこの聖書をまさしく涙ながらに取りあげたり。この聖書たる、このいたましき前兆を討究して今やその真の本源を熟考すべきの資料たるべきものなり。余思えらく、かかる施すに術なき^{すべ}時には、前途に光明を認むべき、その実にわずかなる閃光をも、捕えんとし勝ちのものなりよし、古くより多く行われたる迷

信的方法ながら、ト占〔これは *sortes Biblicæ* といって、聖書を盲目探しに開けて吉凶を判断するのである。〕をなさんにはと。一は神聖多幸の殉教王チャールス及びフォークランド卿の行いたる实例ありて、今日語り伝えらるるところなり。余はこの試みが余にさしたる助力を与えざりしことを告白せざるべからず。されどこれ等恐るべき事件の根源が、将来闡明せられんがために、余はここにト占の結果を記し、この結果が、余の解釈よりも更に明快なる解釈もて、この災禍の真相が摘発せらるる場合に資せんとす。―すなわち余は、聖書を開き、或る語句の上に指を置き、三回のト占を試みたり。第一に得たる語句は曰く、“これを伐り倒せ”（ルカ伝、第十三章第七節）。第二に得たる語句は曰く、“ここに住むもの永く絶え”（イザヤ書、第十三章第二十節）。第三に得たる語句は曰く、“その子等もまた血を吸う”（ヨブ記、第三十九章第三十節）。―

以上が牧師クローム氏の手記から引用した要旨である。マシユウ・フェル卿は、正式に棺へ収められ埋葬された。葬儀の説教は、つづく日曜日、クローム氏によつて講演された。演題は“探知し得ざる進路、すなわちイギリスの危惧と反其教徒の悪行”というのだった。フェル卿が再発せる羅馬教の陰謀の犠牲だったということは、クローム氏の意見でもあり、同時にその周囲の人々が最も一般的にもっていた意見でもあった。

マシユウ卿の令息、マシユウ卿二世は、爵位と家督を継いだ。こんなふうにして、キャスリングム悲劇の第一幕は終わったわけである。そして、べつに驚くにもあたらないことだが、この従男爵パロネットは、父が死んだ部屋は用いなかった。また、ほんとうに、彼が在世の間は、時に来客にあてがうことはあつても、誰もその部屋で寝ることはなかった。

彼は、一七三五年に死んだ。そして、彼の家畜がふしぎにも絶えず斃死し、しかもそれが時のたつにつれて、すこしずつ数を増す傾向を示したというほかは、全体として、彼の治世には、これぞという事件もなかった。こまかな穿鑿ずきの人々は、その従男爵の手記からいろいろな事実を抜粋した一七七二年の“紳士雑誌”ジエントルマンズ・マガジンの記事に於ける、統計を見るがよろしい。従男爵は、とうとう至極簡単なやり方で、右の斃死を喰いとめた。つまり、夜間はいっさいの家畜を小屋に閉め込み、莊園では一匹の羊も飼わないことにしたのだった。それは、夜、屋内に置きさえすれば、なにも襲撃されることがないのに気づいたからだ。それ以後、この斃死は、野鳥か野獣にかぎられた。しかし、なんにしても斃死の徴候については、はっきりした報告もなく、徹夜の見張りも、充分な手がかりがないので、筆者はサツフォークの農夫達が“キャスリング病”と呼んでいるものを、これ以上長々と語るこ

とはやめよう。

さきに言ったように、マシユウ卿二世は一七三五年に死んだが、当然その令息のリチャード卿が跡目を継いだ。教区の教会堂の北側に、大きな家族席を造ったのは、この人の時代だった。彼の考案はいかにも大きなもので、彼の思惑通りにするには、教会堂の不浄地にある五六の墓が、邪魔になるほどだった。この墓の中には、あのマザーソール夫人の墓があった。その場所は正確にわかっていた。これはクローム氏が作製した教会と墓地の計設のノートのおかげである。

家族席を設けるため、発掘されるべき墓が、有名な魔女ウィッチの墓だとわかった時、村では、かなりな興味の的となった。当時まだ少数の人達はマザーソール夫人のことを記憶していたのだった。しかも意外の念と不安が強められたのは、発掘してみると、夫人の棺はほとんどそのまま破損していなかったが、中の屍体は骨も、塵っ屑一つあとかた

なく失せていたことだった。実に不思議な現象である。夫人が埋葬された時、墓掘り泥棒がねらうようなものは、一つもなかった。そして解剖室用に供する以外には、屍体を盗むという合理的な動機を想像することはできなかつた。

この出来事で、魔女裁判の話や、四十年間も地下に眠っていた魔女の業績の話やが、再びしばらく流行した。リチャード卿は棺を焼き払えと命じた。多くの人々は命令通りやってのけたが、ずいぶん向う見ずだと考えた。

リチャード卿が悪質の革新家だったことは事実である。卿の時代以前、ホールは冴えざえした赤煉瓦の、美しい一廓だった。だが卿は、イタリアに旅行して、イタリア趣味にかぶれてしまった。そして、先人よりも金銭の貯えが多かったので、イギリス式の建物を見ると、そこへイタリア宮廷式の建物を遺のこそうと決心したのだった。だか

ら化粧漆喰スタッコや表装石アシュラーを煉瓦にかぶせた。おもしろくもない羅馬式の大
理石を、玄関や花壇に据えた。テイヴォリの巫女寺シベルの模造を、沼の向
う側の堤に建てた。そしてキャスリングムは、まったく新らしいとは
いうものの、ひどく情趣に乏しい光景を呈した。だが、後年に至って、
このあたりの多くの田紳諸君に、これが一つの模型として役立つたこ
とは、大いに賞讃していいわけでもあった。

ある朝（それは一七五四年のことだったが）リチャード卿は、不快
な一夜をすごして起きあがった。強く風が吹いて、煙突の煙がしつこ
く寝室に立ちこめた。でも、ひどく寒いので、火を絶やすことはでき
なかつた。また窓のあたりがガタガタ鳴って、誰だつてちつとも落つ
いた気分になれないのだった。しかもその日のうちに、なにか遊獵を
しようという身分のある客が数人、この館やかたへやって来そうに思われた。

そして卿がおそわれた焦燥（これは狩猟の間中つづいたが）は、時間のたつにつれ、いよいよはげしくなつて、卿は、ゲーム・ブリザーヴァ 獵獸保護者「獵獸を飼育して狩猟規則を嚴重に適用する地主。」としての自分の名声を傷つけはしないかと、心配したくらいだった。しかし、卿を實際になやましていた近因は、ひと晩中眠らなかったという、他の事実によるものだった。卿は、たしかに、二度ともうその部屋で眠むる気にはなれなかった。

以上が朝食の時、卿がむつつり考え込んでいるおも主な事情だった。そこで卿は、食事をすましたあと、どうすれば一番自分の意見に合うかと、部屋を順序よく調べはじめた。ずいぶん長くかかって、一つの事を発見した。それは、東の眺めと北の眺めをもっている窓だった。しかもこの部屋のドアは、下僕達しもべが始終通りすぎるところで、卿はそんなところにベッドを置くのはよくないと思った。いや、ぜひ西向きの

窓のある部屋にかぎる。そうすれば太陽の光がさしこんで、早くから目ざませるようなことはない。しかもその部屋は、家事の通路にあたらずに、限る。——こう卿がいうと、家政婦は思案に困ったようだった。

『ええ、リチャードさま。』と、彼女は言った。『このお屋敷で、そうしたお部屋は一つしかございませぬけれど。』

『どの部屋だ?』と、リチャード卿は訊いた。

『それはあの、むかしの大旦那さま、マシユウさまので——西の寝室でございます。』

『よし、そこにしよう。今夜からそこで寝よう。どう行くのだ? うむ、こう行けばいいんだな。』卿は急いで出ていった。

『ああ、リチャードさま。でも、あすこではこの四十年間、誰一人寝たことはないのです。』

『空気だつて、マシユウ大旦那さまが』

あすこでおなくなりになって以来、まるで入れかえたことはないの
で「ごぞいます。」

こう言いながら、家政婦は、バタバタついて行った。

『さあ、ドアを開けなさい。チドック〔家政婦の名〕。とにかくこの
寝室を見よう。』

で、ドアは開かれた。たしかに、息のつまるような、土臭いにおい
がした。リチャード卿は、窓のほうへあるいて行ったが、たまらなそ
うに、習慣通り遮戸シャッターをうしろに跳ね、窓扉ケースメントを突きあけた。館やかたのこの一
端は、ほとんど模様替えがされていない場所だった。巨大なとねりこ
の樹が、生い茂っているのです、とかくに眺望は遮られていた。

『一日中風をお通し。チドック。で、午後わしの寝台寝具をここに
お移し。わしのもとの部屋には、キルモアの主教さんをお入れするが
いい。』

『ごめんください。』と、その時、べつの声が二人の言葉に割り込んだ。『リチャード卿、ちよっとお目にかかりたいと存じますが。』リチャード卿は振り返った。ドアの入口で、頭をさげている、黒ずくめの人物が目についた。

『突然押しかけて参上いたしましたして、失礼ごめんください。あなたは、たぶん私をゴぞんじありますまい。私はウィリアム・クロームと申す者でございます。私の祖父はあなたの御祖父が御在世の頃、この土地で牧師をいたしておりました。』

『ああ、よく承知しております。クロームさんというお名前は、いつまでもこのキャスリングムでは、通り名ですよ。二世代続いた友誼を新たにすることは、よろこばしいです。唯今なにかわたしに御用でも？お見うけするところ、お急ぎらしい御様子だが。』

『まったくお言葉の通りです。わたしはノーウィッチからバリイ・

セント・エドマンズまで、できるだけ馬を急がして参ったのです。私はあなたに書類をお手渡しするため、お訪ねしたわけです。これはわたしの祖父が死に際して遺^{のこ}しておきましたもので、あなたに立会って頂いて、御一緒に吟味して頂きたいのでございます。この書類には、あなたが親身な御興味をもたれるようなことが、あるように存ぜられます。』

『御懇切なことで。クロームさん、まあ、居間までおいでください。一杯さしあげながら、御一緒にその書類を拝見したい。―で、チドツク、お前は今も言ったように、この寢室に風を入れて、ね。―うむ、ここはお祖父^{じい}さんのなくなられたところだ。―うむ。どうもその樹が部屋を、しめっぽくするようだね。―いや、もうわしは、なにも聞きたくない。面倒なことは言わないでおくれ。わしの言いつけ通りやればいいんだ。―さあ、クロームさん、おいでください。』

二人は、居間兼書齋へ行った。若いクローム氏が持参した包みークローム氏は当時ケンブリッジのクレア・ホールの僚友になっていて、ついでポリエナスの名著を公表した人だがーには、祖父クローム牧師が、マシユウ・フェル卿の変死の日作製した手記その他がはいっていた。

まずリチャード卿は、あの謎のような聖書ソルティーズ・ビプリセト占に向き合った。これを卿はいかにも面白がった。

『ふうむ。』と、彼は言った。『祖父の聖書は、深慮のある一忠告を与えたわけですな。ー“これを伐り倒せ”か。もし、これがあのとねりこの樹を指して言ったものだとなれば、祖父は、わたしがあの樹を、うち棄てては置かないことを確言したわけです。あんな、加答カタル児や瘡きやくの巣になっているような樹は、見たことはありませんからね。』

居間には、この一家の書物が飾ってあったが、リチャード卿がイタリアでの蒐集品が到着中なのと、それを入れる適当な室を増築中なので、書物の数は多くはなかった。

リチャード卿は、手記から書架を見あげた。言った。

『その老予言者「ト占に使った聖書を指す」は、まだあの中においてだろうか？一つお目にかかりたいものだ。』

部屋を横切って、卿は、一冊のどっしりした聖書を取り出した。たしかにその聖書だった。飛頁フライリーフ「本の前後にある白紙。」には、こうした銘記がされてあった。――“マシユウ・フェルへ。その愛する教母アン・アルダスより。一六五九年九月二日。”

『この予言者を再検討することは、わるい考えじゃないですな、クロームさん。わたしは旧約の歴代志略のなかで、あなたと御祖父とわたしの二つの名でもってやってみましょう。ふむ！ここになんと書い

てあるかな？ “なんじ朝あしたにわれを求めんも、われあらざるべし”か。
なるほど！あなたの御祖父はいい予言をされたじゃないですか。え？
これでもう、わたしには予言者無用です。見解が同じです。いや、ク
ロームさん。わたしはあなたの持って来られた包みに、衷心お礼を申
します。あなたはよほどお急ぎでしような。まあ、どうぞもう一杯お
重ねください。』

こんなぐあいには、しん底から款待の意を表して（それはリチャード
卿が、この青年の話し振りや態度に好感をもっていたので）、二人は
別れた。

午後になつて、客が来た。キルモアの主教、メリイ・ハーヴィ夫人、
ウィリアム・ケントフィールド卿等であつた。五時に正餐ディナー、それから酒、
トランプ、晩食サッパ、そしておのおの寝室に退散した。

翌朝、リチャード卿は、気分がすすまないというので、みなと狩獵

には出かけなかった。卿は、キルモアの主教と閑談した。この主教は、当時のアイルランドの主教達とはちがって、その教区を巡回し、そして実際そこにかなりな時日駐在するのだった。

主教とリチャード卿は台地テラスをあるきながら、この館やかたの模様替えや改築について、いろいろ語り合っていたが、主教は、西の部屋の窓を指さして言った。

『リチャード卿、あなたは、あの部屋へは、わたしの受持つアイルランドの教徒を、一人だって泊とめることはできませんよ。』

『それはどういうわけです？あの部屋は、実はわたしの部屋なのですが。』

『それはね、アイルランドの農民は、むかしから、とねりこの樹のそばで眠ることを、最も縁喜がわるいとしているからですよ。あのあなたの寝室の窓からは、二ヤードとはなれていないところに、すばら

しいとねりこの樹が茂っているではありませんか。おそろくー』と、主教は微笑しながらことばをつづけて、『あの樹はもう既に、あなたにその威力の一端をあらわしていますな。というのは、忌憚のないところ、あなたは夜の御休息がよくとれているようには見えませんからな。』

『まったく、そのためかほかのわけかわかりませんが、わたしは夜十二時から朝四時までしか眠れないのです。だが、あの樹は明日切り倒しましょう。そうすればわたしは、あの樹のことで、もうなにも聞かなくてもすむわけです。』

『その御決心には大賛成です。あの樹はあんなに葉が生いふさがっているため、空気の呼吸が困難で、どうも衛生的ではないようです。』
『仰有る通りだと思えます。だが昨夜は窓を開けなかつたのです。

あの窓はなんだかガタガタ鳴りつづけたのでーきつと枝が窓をはたい

たのでしようが—それで、目はさめ通しでした。』

『そんなことはあり得ないと思いますな。—「」—「」から窓を「」らんなさい。一番ちかい枝だって、大風が吹いたのでなかったら、窓扉にさわれませんよ。しかも昨夜はまるで風はなかったです。枝はフイット呖フイットはなれても、ガラスにはあたりませんよ。』

『まったくです。では、あんなにガリガリ、ガタガタした音はなんだったのでしょうか。—ええ、しかも、窓まど闕しきいには埃が一杯かかって、筋や傷痕きずあとがついていたのですが。』

とうとう、鼠ねずみが常春藤つたを伝たつてはいのぼったのにちがいないと—これは主教の意見だった。リチャード卿はその意見に飛びついた。

で、その日はなにごともなく、夜になった。来客連中は卿におやすみの挨拶をして、それぞれ部屋へ引きとった。

リチャード卿も、今、寢室—あの、祖父マシユウ卿が使った寢室に

はいった。灯火を消してベッドに横たわった。この部屋はちょうど厨房の上になっていた。そとは静かな暖かな夜だったので、窓は開けはなしにして置いた。

—どこからとなく、ごくちいさな光が、ベッドのあたりに現われた。だが、そこにはまた一つの奇怪な動きがあった。それは、リチャード卿が、音といえはいえる、実にわずかな音をたてて、頭を急にあちこちへ動かしているもののように思われた。また、ものまぎらわしい薄暗がりなので、卿は幾つかのまるい鳶色の頭を持ち、それが胸くらいの高さで前後に動いているようにも思われた。それは恐ろしい幻影だった。いや幻影以上のなものでもないのか？いやそこに！そこになにか、仔猫のようにやわらかなドタリという音もろとも、ベッドのそとへ落ち、キラツと閃めいて窓から失せ去ったものがある。つづいて、ほかの四つも—そして、そのあとは再びひっそりとなった。

“なんじ朝あしたにわれを求めんも、われあらざるべし”――

マシユウ卿のように、リチャード卿も――ベッドの中で、黒ずんで死んでいた！

この知らせに、客や下僕しもべたちは、まっ青になって無言のまま、窓の下に集った。ローマ法王の密使てんきというイタリアの毒殺者等は、その方法として空気に毒を撒いたのだったが――ここに集った人達も、こうした想像を敢えてした。キルモアの主教は、とねりこの樹を見あげた。すると、低い枝の股に、一匹の白い牡猫トム・キャットがうずくまって、なが年の間に腐蝕してできた幹の空洞うつつろを見おろしていた。猫は、その中にあるなにかを、ひどく心をひかれて見つめているようだった。

突然猫は、空洞うつつろのふちへ這いのぼり、中へ頸を伸ばした。その途端

ふちが崩れた。猫は、空洞の中へ滑り込んだ。みんなは、その落ちる音で、樹を見あげた。

誰だって、猫が叫びを発することは知っている。だが今、このとねりこの大樹の幹から出たような、こんな猫の叫びを聞いた人はあるまい。二度か三度―目撃者達ははっきりはおぼえていなかったが―その叫びが聞えた。つづいてなにか騒ぎと争いの音が、かすかに、蔽い包まれたように響いたかと思うと、バツタリ絶えてしまった。だが、メリイ・ハーヴェイ夫人はまったく気絶した。家政婦のチドックは両耳を押へて逃げ出し、テラス台地でころんだ。

キルモアの主教と、ウイリアム・ケントフィールド卿は、そこへ残った。しかし二人とも、猫の叫びだけで、気力を挫かれていた。一二度唾を呑みこんで、やっと言った。

『あの樹には、もつとなにかあるようです。すぐ調べなくては。』

この相談がきまって、梯子が運ばれた。園丁の一人がのぼっていつて、空洞を見おろしたが、幾つかのものが、動いているようないが、朦朧とわかるほかには、なにもなかった。そこでカンテラをともし、綱でそれを中へおろしてみることにした。

『こいつで底を探ってみなくっちゃなりません。生命がけでござい
ますよ、旦那様。なにしろあの恐ろしい死の秘密は、この底にあると
思われますからな。』

園丁は、カンテラをもつて、また梯子をのぼった。そして用心して空洞にそれをおろした。見あげている人達は、園丁が空洞へ首をかがめた時、カンテラの黄色い光が、彼の顔を照らしたのを見た。たちまち、その顔は、信じることもできない恐怖と嫌悪でサツと変った。怖気立
った声をあげて、梯子からのけ反り落ちた。――幸いにも二人の下僕が
彼を抱きとめたが――カンテラは樹の中へと落してしまった。

彼は息も絶え絶えだった。しばらくは口もきけなかった。

その時みんなは、またほかの事へ目を向けなければならなかった。

カンテラは落ちて、樹の底でこわれた筈である。その火は、底にたま
った枯葉や芥あくたについた。五六分のうちに、濃い煙が舞いあがり、つづ
いて焰を噴ふき出した。手短かに言つて、樹はメラメラと燃えあがった
のだった。

そこに居あわす人たちは、数ヤードへだてて輪をつくった。ウイリ
アム卿と主教は、人をやって、できるだけ武器や棒のたぐいを持って
来させた。というのは、樹が獣の巣としてどんなふうに使われていた
にしても、火で焼きつくされるだろうことは、あきらかだったから。

果してその通りだった。まず、樹の股に、焰で蔽われたまるいずーたい図体
―人間の頭ほどの大きさの―が、忽然としてあらわれ、潰れて落ちる
ように思われた。こんなことが五六回。つづいて同じようなまるいも

のが空中を飛んで、草の上に落ちた。そのまま動かなくなった。主教は無理に近づいて、それを見た。―筋っぽい、焦げた、大きな蜘蛛の死骸にほかならなかった！

そして火が低く燃えさがるにしたがい、もっと恐ろしいこんな死骸が、幹から爆ぜ出しはじめた。これ等は、みな灰色の毛で蔽われていてるようにみえた。

その日中、とねりこの樹は燃えた。それがきれぎれに倒れるまで、人々はそのぐるりに立っていた。そしてしきりに飛び出して来るやつを殺した。すっかりなにも現われなくなるには、かなりな時間が過ぎた。みんなは用心ぶかく四方から近づいて樹の根を調べた。

『われわれは、樹の下に、地中に一つのまるい穴があるのを発見した。』と、後にキルモアの主教は言った。『その中には、あきらかに煙で窒息したこうした動物の残骸が、まだ二つ三つあった。そしてもつ

と奇妙なことには、この巢の一方の壁に、人間の木乃伊みいらとも骸骨とも
いっていいものが、うずくまっていた。皮膚はひからびて骨にくっつ
き、すこしばかり黒い髪の毛が残っていた。―この髪の毛で調べたと
ころによると、それは女の屍体に疑いないということが認定された。
しかも、たしかに、五十年間ここに埋れていたということも！』